

令和 7 年 3 月 21 日

世田谷区立桜丘中学校

校長 山本 武 様

区立桜丘中学校学校関係者評価委員会

委員長 實野 雅太

令和 6 年度学校関係者評価委員会報告書

1 はじめに

令和 6 年度世田谷区立桜丘中学校学校関係者評価委員会は、世田谷区教育委員会作成「世田谷区立学校 学校評価システム」に基づき、本校の取組の成果について評価し、ここに報告する。

本報告書は本委員会が学校関係者として関心を持ってきた「授業や日常生活」「校風の継続と本校への誇り」「教員の働き方」の 3 つの観点から本年度の本校の取組を評価する。さらに今年度のアンケートから浮き彫りになった「学年間の違い」、それから数年にわたって調査してきた生徒の読書習慣について報告する。

本報告書作成に用いた資料は次の通りである。

- ・ 生徒アンケート
- ・ 保護者アンケート
- ・ 地域の方々アンケート
- ・ 学校自己評価
- ・ 学校公開期間中の授業見学
- ・ 教職員へのヒアリング

2 授業や日常生活

昨年度の生徒アンケートと比較して学習についての質問事項は「とても思う」がまた下がっていた。とはいえ、「思う」も入れると肯定的回答も昨年度と同等の数値になるため、生徒の授業に対する要求レベルが上がっているとも言える。しかしながら、生徒アンケート全体を通して肯定的回答（「とても思う」「思う」で 90%以上）となったトップ 5 は授業に関する項目が 4 件、残り 1 件は“学校行事が楽しい”であり、学校生活の満足度は非常に高いものであると言える。保護者アンケートからも“学校行事が楽しい”への肯定的回答は 85.3%と非常に高くなっている。生徒を普段から見ている保護者にも伝わっていることが分かる。これは指導に関して先生方の不断の努力が見て取れる内容であり、今後も継続して指導をお願いしたい。

“ICT を利用して分かりやすい授業をしている”の項目は昨年度と同程度の数値を示した（表 1）。「思う」のボリュームが多くなったので ICT 機器の活用が進み、生徒も使いこなしている証拠であると思われる。その分、ICT 機器がないと授業や学習ができないという状況になっては困る。教育 IT 先進国のスウェーデンではデジタル教科書の導入以降学力が低下したため脱デジタルの方向に進むことが予想される。そのため、教科書と板書でも授業が成り立つよう先生方には研修を続けてもらいたい。デジタルとアナログを適材適所で活用することが重要であり、音読機能などは識字に課題のある生徒にとって有効なツールになる。

表 1 ICT を利用した授業についての評価

項 目	1 年生	2 年生	3 年生
令和 5 年度	とても思う	とても思う	とても思う
先生は、映像やタブレットなどの ICT を利用し、分かりやすい授業をしている。	58.4	39.5	44.1
	思う	思う	思う
	37.6	42.6	47.8
令和 6 年度	とても思う	とても思う	とても思う
先生は、映像やタブレットなどの ICT を利用し、分かりやすい授業をしている。	53.1	46.0	40.0
	思う	思う	思う
	38.3	47.2	45.3

スマートフォンの使用（表 2）については、非常に大きな変化が見られた。例年、80%以上の肯定的回答になっていたが、今年度の 1 年生は半数にとどまり否定的回答が 30%と 2・3 年生とは違う傾向を示した。小学校での教育の影響か、何らかのトラブルを目撃したことなどが考えられるが、校内で自由に使えることには一定の制限がやはり必要であると思われる。来年度から使用について見直す方向とのことで実施の影響を見守っていきたい。

表 2 スマートフォンの使用についての評価

項 目	1 年生	2 年生	3 年生
生徒アンケート			
スマートフォンを学校で利用できることはよいことだ。	55.5	79.8	85.3
スマートフォン、タブレットは使い方を考えて使用している。	79.7	92.7	89.5
保護者アンケート			
スマートフォンを学校で利用できることはよいことだ。	39.8	45.2	47.9
我が子にスマートフォン、タブレットは使い方を考えて使用させている。	81.7	80.1	76.1

表 2 から保護者アンケートではスマートフォンの使用についてよいと思っている割合は半数に届かなかった。反面，“スマートフォン・タブレットの使い方を考えて使用させている”と回答した保護者の回答は全学年で 8 割近くと高い結果となっている。しかしながら，スマホなどをめぐるトラブルも起こっていると学校関係者評価委員会に意見も届いており，生徒や保護者が考えている以上にモラルやマナーの教育は必要に迫られている。そのためには学校のみならず，ご家庭での教育にも協力をしていただかなければならない。校外でのトラブルについては教員の目が届きにくく，そういった指導は教員においても対応が難しい。教職員の教育活動に専念できる環境づくりと働き方改革のためにも保護者の皆様にはご理解とご協力をお願い申し上げる次第です。

付随して，スマートフォンにも関連して“学校生活でのけじめ”も重要視する必要がある。自由闊達は本校の校風であるが，そこにも様々な“一線”がある。特に教師と生徒は大きく異なるものであり，これから社会の構成員となっていく生徒にその違いと区別は身に付けさせていくべきであろう。先輩をからかう後輩が目撃されており，一線を越えることは社会において自由などで通用するものではない。すのこに土足で上る生徒もおり，公共の精神を失くしては自由が制限されても仕方ない。加えて，定期試験を控えた職員室への出入りも公平性のためにも検討をお願いしたい。また，校外にて生徒が本来は授業の時間に歩いていることもよく見かける。様々な事情があることは理解しているが，多いようにも感じるため保護者との連絡体制や時間を守る行動は正確をお願いしたい。本校の生徒は高等学校の選択理由で重視する項目で校則が上位に来ており，校則に対して敏感になっていることも理解はできるが，社会にも数多くのルールは存在する。真に自立と他者との多様性の共存を学ぶためにはルールや校則をはじめとしたけじめを学ぶことは生徒の人生にとって重要になるだろう。そのためにも先生方にもけじめのある行動をお願いしたい。

3 校風の継続と本校への誇り

本校の特色である“多様性を尊重する校風”と本校への誇りについて尋ねた結果が表 3 である（保護者には“桜丘中に入学させて良かった”の回答結果である）。これまでと同様，生徒，保護者ともに多様性を尊重する校風を残したいと考える回答が多かった。多様な背景を持つ生徒にとって本校は貴重な居場所であることは確かなものの，支援が必要な生徒を非常に多く受け入れたことにより教員の負担だけでなく，頑張っても見てもらえなくなる生徒も増加していると言わざるを得ない。昨年度の同じ文言だが，マンパワーの届く範囲に制限することが働き方改革と安心して学べる環境になるものと提言する。

表 3 多様性を尊重する校風の継続の希望と本校への誇り

項 目	生徒	保護者	地域の方々
多様性を尊重する校風を残したい。	90.3	86.7	84.6
桜丘中学校の生徒であることを誇りに思う。	76.9	76.5	—

本校の特徴としてホット、すまいる、サイレント等、生徒の状況に応じて学習できる環境を提供していることは非常に良いと思われる。特にサイレントは 1 人でいることや、他者と関わらないなどのルールが人気となっている。アクティブラーニングや協働的な学びなども言われて久しいが、このような環境は一定数の生徒にとって望ましいものであると考える。しかし、この運営には大人の関与が求められるため、運営体制の充足を学校にお願いしたい。

自由闊達な校風のためにも “社会のルール・マナーの理解と遵守” の評価項目は重要視している。今年度も同様に質問した結果が表 4 である。昨年度は地域の方々の回答は 7 割と一昨年度より 10 ポイントも下がっていた。今年度は一昨年度と同様の数値に改善しており、非常に喜ばしく感じている。今後も本校の生徒としての自覚を持ち校外で行動できるよう引き続き指導をお願いしたい。

表 4 社会のルール・マナーの理解

項 目	今年度	昨年度
社会のルール・マナーを理解している。(生徒アンケート)	91.5	92.6
我が子に社会のルール・マナーを理解させている。(保護者アンケート)	88.4	89.6
本校の生徒はルール・マナーを守っている。(地域アンケート)	84.6	73.1

4 教員の働き方

教職員へのヒアリングなどを通して働き方改革が進み、多くの教職員は 8 時頃出勤して 20 時頃まで学校にいるようだ。職員室内での雰囲気も良くなっているが、情報共有については連携の強化をお願いしたい。特に定期試験の出題範囲は内申点ひいては推薦入試に直結するものであり、そのミスは生徒の信頼を失うものである。

若い先生が非常に多く活気はあるが、教師は生徒の見本となることも忘れないでいただきたい。生徒の服装・髪型に自由度があったとしても社会人として範を示すことは他の学校と変わらない。多様性を尊重する校風も大事であるが、本校は “いち公立学校” であることを忘れずに職務にあたっていただきたい。この点は今後異動してくる教員や、異動する教員にとっても異動先での順応まで時間がかからず働き方改革に繋がると考える。

また、特別な支援が必要な生徒に関する行政への支援申請が通らず、本来は必要性が高くない生徒の申請が通ることが報告されており、診断書の影響なども考えられるが、行政と現場の乖離があるように感じられる。本当に支援が必要な生徒と本校の教員のためにも教育委員会にも連携を強くお願いしたい。

昨年度は産休代替の養護教諭が何度も変わったことがあった。要因として、保健室に溜まる生徒がいたことが報告されている。保健室の利用についてもルールを設け、本当に必要な生徒が使えるようにすることと、養護教諭に負担を強いることがないように配慮をお

願いたい。

5 学年間の違い

世田谷区立中学校に共通の項目で、肯定的回答に学年間で 10 ポイント以上の違いがあった項目を表 6・7 に示した。今年度は学年間で 10 ポイント以上の違いがあった項目は、保護者アンケートで非常に多かった。生徒アンケートでは部活についての質問が半数となっている。中学校 2 年生に谷があり、伸び悩みや狭間の代の苦労などがあるように推察される。学習に関しては 3 年生に近づくにつれて評価を気にしていることが分かる。高校入試を控えた生徒にとっては非常に重要な評価であるため、先生方には評価の妥当性を担保できるよう努めていただきたい。

表 6 10 ポイント以上違いがあった項目（生徒アンケート）

項 目	1 年生	2 年生	3 年生
生徒アンケート			
先生は、提出物やテストなどを分かりやすく評価している。	89.8	75.9	73.7
私は、家庭で宿題や e-ラーニングなどで学習している。	58.6	52.1	62.1
部活動は、楽しい。	82.8	70.5	75.8
部活動は、達成感がある。	82.9	69.9	75.2

表 7 10 ポイント以上違いがあった項目（保護者アンケート）

項 目	1 年生	2 年生	3 年生
保護者アンケート			
本校は、子どもの進路や将来のことについて考える授業がある。	39.8	58.8	56.3
本校は、進路や将来の仕事に関する情報を提供している。	38.7	58.8	54.9
本校は、近隣の（幼稚園）小・中学校で構成する「学び舎」の（幼稚園）小学校に行ったり、（幼児）小学生が来たりする機会がある。	57.0	68.2	59.1
本校の教育活動は、子どもの成長につながる。	64.5	77.0	71.2
部活動は、子どもにとって楽しい。	75.3	63.5	65.5
本校は、保護者に指導の重点を伝えている。	66.6	50.0	61.3
本校は、教職員が指導の重点を理解して教育活動に取り組んでいる。	60.2	46.0	56.4
私は、今年度の学校の指導の重点を理解している。	45.2	34.1	39.4
本校は、地域の人や施設を教育活動に生かしている。	49.5	62.7	49.3
本校は、安全な学校づくりを進めている。	64.5	76.9	68.4

保護者アンケートには数多くの差がある項目があり、すべてへのコメントは割愛するが

特に重要と考える項目は“指導の重点”である。各学年で指導の重点は異なってくるとは思うが、指導内容についての周知は積極的に行っていただきたい。現状、保護者は年 2 回と聞いており、各学期に実施することも重要ではないかと提言する。回数を増やすことは教員の負担も増すが、保護者同士の情報交換の場になると考えられ、特に受験を控えた 3 年生の保護者にとっては重要な場になるものとする。さらに、保護者会のほかに学校公開日などにもフリースペースを設けることで会話ができると思われる。こういった活動を促すことで受験や生徒の学校生活について保護者の意識も変えていくことが期待できると考える。

6 読書習慣の経年変化

読書習慣について、生徒には月に 2 冊以上本を読んでいるかを、保護者には我が子が図書館を十分に活用しているかを平成 30 年度から尋ねている。平成 30 年度では月に 2 冊以上本を読む生徒と読まない生徒はどちらも 45%程度だったが、令和元年度から読む生徒は 3 割に減り、読まない生徒は 5 割に増えた。我が子が図書館を十分に活用しているかについての保護者の回答は、平成 30 年度で肯定的な回答が約 4 割で否定的な回答が約 6 割だったが、令和元年度からは肯定的な回答が 2 割台に減った。こうした状況から活字自体に触れていないのではないかと危機感を抱き、昨年度の独自項目には“月に 2 冊以上漫画を読んでいる。(本、タブレット、スマホなど媒体は問わない)”と新たに加えた。しかし、漫画でも本から離れていることが分かった。

今年度は“新聞、雑誌、漫画、ネットニュースなど活字メディアを読む習慣がある。”と聞き方を変えた。また、読書習慣と併せて回答の仕方も(A:毎日 B:週に 3 回以上 C:週に 1 回以上 D:月に 1 回以上 E:まったくない)と変更した。その結果が表 8 に示す。

表 8 読書習慣の調査 (生徒アンケート)

項 目	1 年 生	2 年 生	3 年 生
生徒アンケート			
本を読む習慣がある。(A:毎日 B:週に 3 回以上 C:週に 1 回以上 D:月に 1 回以上 E:まったくない) ※	A: 19.5	A: 12.9	A: 17.9
本、タブレットなども含む。ページ数は問わない。	B: 17.2	B: 16.0	B: 13.2
	C: 17.2	C: 15.3	C: 13.7
新聞、雑誌、漫画、ネットニュースなど活字メディアを読む習慣がある。(A:毎日 B:週に 3 回以上 C:週に 1 回以上 D:月に 1 回以上 E:まったくない)	A: 29.7	A: 30.1	A: 25.8
	B: 24.2	B: 28.2	B: 25.8
	C: 20.3	C: 19.0	C: 19.5

この結果から、どの学年も活字メディアには触れている割合が高いことが分かった。また、毎日本を読む習慣がある生徒も 2 割近くいることが分かり安堵した側面もある。

7 学校関係者評価委員会としての総合所見

上記の調査内容から以下の5点を本校の課題として指摘する。

- (1) スマートフォン、タブレットの使い方についてより指導を手厚くする。保護者向けにも講習会を開くなど学校外での使い方に共通の認識を持って頂くようにする。併せて、授業においてもICT機器やタブレットを多用するばかりでなく、教科書や板書などのアナログな方法も重要であり、適材適所の活用と研修をお願いしたい。
- (2) 自由闊達、多様性ある校風を継続していくための“けじめの教育”をお願いしたい。
- (3) 多様性を尊重する校風は重要であるが、教職員の負担を減らさなければならない。ベテラン教員や特支の専門家を入れて知見の共有を図る必要がある。
- (4) 保護者への指導の重点の周知と理解を図る。
- (5) 教育委員会との連携の強化を強く要請するものである。特に、特別支援学級ができることもあり、本学への人材の配置と予算の計上は必要不可欠である。また、部活動の地域移行に向けて指導員の確保を教育委員会が主導して実施していただきたい。

以上

桜丘中学校学校関係者評価委員会委員

小杉雄太 齋藤全祥 實野雅太
鳥海香苗 信國明子（五十音順）
事務局 高橋真弓